

お墓参り

小池辰雄「パラディソ」墓前にて

2000年4月2日(西多摩霊園にて)

奥田昌道

墓碑銘「PARADISO」 キリスト直結 キリストと一つ キリストの中に 常にパラ
ラディソ 愛の存在であれよ

●墓碑銘「PARADISO」

本日、小池辰雄先生のお墓に参りまして、感慨無量というよりかごぎいませぬ。私にとつてちょうど一年になろうとしています。そのちょうど一年たつて、二年目にさしかかる始めの日曜日にこうして先生のお墓に詣でることができたというのは、これはまた不思議なお導きだと思っております。先程からずっとこの墓碑銘の

「PARADISO」(パラディソ、楽園)

そして、その上の十字架をじつと見つめておられますと、本当にここに先生の思いがこめられているということを実感いたします。

一人ひとりお参りしてらっしゃた皆さんのお姿を見ますと、なにか私はあの「四十七士の赤穂浪士」を思います。いろんなことを言われながら最後まで貫いて、始めは二百人ほどいたそうですけれども、最後は四十七士というふうになんか段々いろんな事情からしぼられてきて、その方々は本当に主君に命を捧げたという。なにか私の思いでは、ここに遺つて、こうしてお参りなさる兄弟姉妹の皆さま方がこの先生を自分の主君と慕って、そしてまるごと呑み込んで、プラスもマイナスもまるごと引き受けて、そして、

「従つてまいります」

という「トロイエ」(忠実)を貫いている、そういう武士ものぶという四十七士の姿を思います。

先生は本当にそれで喜んでいらつしやると思います。我々には何ひとつ、これという目立ったことはなくても、とにかく先生が告白され、身体で現せられた、生き貫かれた、

「その福音を一人ひとりが身体で現していく。著作は何一つ著せなくても、一人ひとりの人生そのものが、先生のお作りになった一生一品だ」

と、そういう姿でそれぞれらしく生きぬかれることが、私は先生の生命をいただいた、先生から生命を分かち与えてもらった者としての務めだろうと思っております。

●キリスト直結

キリスト教はカトリック教会が一番の代表ですし、ローマ法王は立派な方ですし、ああいう組織というものもこの地で証しをしていくひとつの体としてはとても大事な存在で、



四分五裂しているよりも一つのまとまった教会であるというのが素晴らしいことには違いありませんけれども。それはそれとしての存在理由はある。

しかし、

「キリスト直結」

ということを生先生は告白してくださった。謂うならば、大企業と言えれば変ですけれども、一つの統一的な大企業という、国家に等しいような教会制度が片一方にある。

それと同時に今度はそれと対極をなして、私たちのような名もなき者が、まるで一つの砂粒のような、そういう個というものがやはり信者として存在する。それを主は許してください祝福してくださいということですよ。

「何があなた方をそうならしめているのか。どうして、大きな組織の一員となつて主に証しをしないのか」

と、もし問われるならば、私の答は

「キリスト直結、キリストの生命をこの身体で今生きていくという証し人として生きる事が、キリストから私たち一人ひとりに与えられた使命なのです。これが御意なのです。そのことを揺るぎなき確信と事実をもって現してくださいだったので小池先生なんです」

と、それを私は胸を張つて言いたい。

●キリストと一つ

「どこが小池先生の特徴か」

と問われたら、

「小池先生は聖書の言を、キリストの生命を現実、現に生きたひとだ。信じている人は多いでしょう。けれども、先生は信じてなんかいない。キリストが先生と一つになっておられる。いや、先生はキリストと一つになって、その生命を生きたられた」

と答えたい。聖書の中に、

「彼(キリスト)は死をほろぼし、福音をもて生命と朽ちざる事とを明らかに為給

えり」(テモテ後書1・10)

とあります。それから、キリストは、

「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。おおよそ生きて我

を信ずる者は、永遠に死なざるべし」(ヨハネ11・25〜26)

と言われた。そのことを文字通り受けとつたのが小池先生です。

「私は死なない。小池先生は死んだなんて絶対に言うな。私は変貌するんだ。身体を脱ぎ捨てて、霊体に変貌して永遠に生きるんだ」



と。そのことを本当に事実として受けとって、その中に生きておられた。だから、「クリスチャンとは何か。キリストの生命に化された者である。今、現にこの世でキリストの生命を生きていなかったら、クリスチャンではない」

と。そういうふうには、このキリストの生命を、

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり」

というキリストご自身を生まましく、その身をもって生きるという生き方を現してくださいだったのが、私にとっては小池先生だったんです。その他のことをいろいろ説いたり、なさったりした方はあります。けれども、そのようにリアルに本当に現うつつとして、

「キリストと一つで生きろ」

ということをあのようにつひつひつ続けてくださった方は先生をおいて他にない。

●キリストの中に

先生は、

「祈りとはお願いではない。キリストの中に入ってしまふことだ。十字架を通って、キリストの中に身を躍り入れれば、自分を投げ込めば、直ちにキリストと一つだ。直ちに、キリストの生命が私を貫き満たし、そして力に溢れてしまふ。力が来ようがない。楽でしようがない。嬉しくてしようがない。これはパラディソ(天国)だ」

と言っておられた。私はなかなか先生のように、

「キリストの中に飛び込む」

というそのジャンプができなくて、非常に苦しみました。いつも言葉では、飛び込もうと思わなくても、飛び込めなくて、私は苦しんだ。今に至るまでですよ、この最近に至るまで。ところが、東京に来てから私の告白は、

「いや、飛び込めない自分をキリストは既に包んでくださっている」

と。

「み霊の我が主は わが身を抱き

十字架に耐え得る 力を賜う」(召団讃歌B2「使徒らの昔を」)

という歌詞にありますように、キリストは、

「飛び込めないお前を私は抱いた。もう、お前はその中に居るではないか、大丈夫

だよ」

と。それを私は新宿へ来て、告白し続けているんです。

「飛び込め！」

と言うと、

「私は飛び込んでいるだろうか、飛び込めないだろうか？」



と気になるんですね、私のように気の弱い人間は。ところが、

「いや、お前の飛び込みたいという気持ちがあつたよ。もうお前を包んで抱いているから大丈夫だよ。抱きしめていてではないか。お前は私の中だ。大丈夫だ」

と、そういうキリストの愛の迫りを感じますと、もの凄くありがたくてね。あり難くてあり難くてしようがない。先生、

「そうだった！」

と言つてくださってますね？

「お前は少し気の弱いやつだから、それで許してやるよ。わしのように飛び込みの上手な——水泳の飛び込み台から飛び込む——上手なやつはいいけれども、お前のように不器用なやつはそのままでいいから。もうキリストは抱いているから大丈夫だよ。それでいいんだよ。気づいたら、いいんだよ」

と。キリストの力が絶大だから、我々は救われている。キリストの祈りが絶大だから、私たちは弱い祈りも助けられているんです。すべてはキリストが先きなんです。キリストの御救いの御業は——

「始めに行為ありき」

というそのキリストの救いは——全き救いなんです。もう成ってしまったんです。それに気づいたらいいんです。気づいて、

「ありがとうございます」

と言うのが、いただいている姿ですからね。そういうことを先生は日常生活で教えてくださった。

●常にパラダイス

先生は毎朝毎晩、端坐して、

「主さまー」

と祈つて、そして一日が始まり一日が終わる。

「私は眠られない夜なんて絶対にない。キリストの中に抱かれているからだ。目に見える現実がどんな現実であろうと、それを突き抜けたところに私は抱かれて在るから、誰が何と言おうと、そんなことは平気だ。だから、常に平安である。常にパラダイスである。」

と言われた。そこには先生は、

「私は限りなく赦されてある。主イエス・キリストの十字架で限りなく赦されてある。過去・現在・未来、すべてまるごと赦され、そして、生命の中に変貌させられてるんだ」

と、そういう先生の確信、現実があつた。



コリント書にも、

「我らが外なる人は壊るれども、内なる人は日々あらに新たなり。……我らの顧かえりみる所は見ゆる者にあらずで見えぬ者なればなり。見ゆる者は暫時しばらくにして、視えぬ者は永遠とこしえに至るなり。」(コリント後4・16～18)

とあります。先生は、この見えないキリストの聖霊の生命という、それだけを見つめて歩かれました。

「目をあげて天を見よ」

と。先生は星の好きなお方でした。お月さんの三日月をすぐ見つけて喜んでおられたし、天に虹を見て喜んでおられた。

「それを現うつとして君たちは生きるんだよ」

と。魂はいつも天を駆け巡っているような、そういうお方でした。

●愛の存在であれよ

私は本当に不思議だと思っんです。先生が天上に往かれて三年目の昨年、東京に導かれて、しかも新宿集會のごく近くに住まいを与えられて、一年間本當に守られ導かれてきました。東京の集會、新宿集會と共に私はありましたし、私の仕事も祈りの中になりました。主さまの導きの中になりました。私の存在するところ、存在するところにキリストは光を放つてくださいました、愛をくださいました。

だから、

「皆さん一人ひとりが愛の存在であれよ」

ということですよ。

「愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕たかぶらず、非礼を行わず、己の利を求めず、憤いらいらず、人の悪を念おもわず、不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、凡おおよそ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事耐うるなり。」(コリント前

13・4～7)

「愛は荷ないぬぎ、信じぬぎ、祈りぬぎ、愛しぬく。そういう愛の姿であれよ」と。どうぞ、私たちの存在そのものがキリストの証であるように。

「我を見し者はキリストを見しなり」

と。我々の存在そのものからキリストの光が発しますように。それは愛の光であり、生命の光であり、人を包む豊かさなんです。暖かさなんです。

それが、どうぞ、新宿集會のお一人お一人の中に成っていきますように。

京都召団、奈良、裾野、大阪、四国と、それぞれの召団の魂を受け継いでおられる方々の中にそれが成っていきますように。

聖名にあつて本當に感謝申し上げます。アーメン。

